The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	世界の宗教による地球環境保全運動 ： 「ウインザー声明」にみるバハーイー教、ジャイナ教、シク教、道教の自然観、人と自然との関係
Author(s)	佐田, 喜朗
Citation	宗教と社会貢献. 2023, 13(1), p. 1-25
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90831
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

研究ノート

世界の宗教による地球環境保全運動

「ウインザー声明」にみるバハーイー教、ジャイナ教、シク教、道教の自然観、人と自然との関係

佐田喜朗*

Global Environmental Conservation Movements by the World's Religions

The Windsor Declaration: Four Religions' Views on Nature and the Relationship between People and Nature (Baha'i Faith, Jainism, Sikhism, and Taoism)

SADA Yoshiro

はじめに

地球環境保全問題が今日の人類が抱える最大の課題の一つとなっている現在、世界の宗教界はこの問題にどのように取り組もうとしているのか、著者は、［佐田 2022］において、1986 年、世界自然保護基金（Worldwide Fund for Nature 以下 WWF）主催により、イタリアのアッシジにおいて、自然環境保全をテーマに開催された世界の 5 大宗教（ユダヤ教、キリスト教、イスラム教、仏教、ヒンドゥー教）による「アッシジ会議」の内容から各宗教の自然観、人間観についての概要を見た。

本稿においては、アッシジ会議ののち、こうした動きに賛同して、WWF 宗教ネットワークに加わったバハーイー教（1987 年）、シク教（1989 年）、ジャイナ教（1991 年）、道教（1995 年）について自然観、人間観を概観したい。もって、これら 4 宗教、アッシジを含めた 9 宗教の環境保全運動の出発点ともいうべき考え方を把握し、その後、各宗教がどのような具体的活動を展開し今日に至っているのか、世界の宗教が環境問題にどのような回答を示しているのか、その社会的価値の考察といった研究へとつないでいく布

* 國學院大學大学院文学研究科神道学・宗教学専攻博士後期課程

石としたい。

WWF を軸とするこの宗教ネットワークは、1995 年に日本及び英国ウインザー城で宗教と環境保全に関するサミット（Summit on Religions and Conservation）を開催し、合計 9 宗教が、「ウインザー声明」（Windser Statement）を発表し、それぞれの宗教における自然観および自然と人間との関係についての考えを明らかにするとともに、環境保全運動に一層取り組む姿勢を明らかにした(1)。

この会議で声明を発した 9 宗教のうち、アッシジ会議に参加した 5 宗教は、内容的にほぼ重複するため、本稿では 4 宗教の内容に焦点を当てた。

なお、このウインザーでの宗教サミットを契機として 1995 年 7 月から英国に本部を置く非営利法人「世界宗教環境保全同盟」（Alliance of Religions and Conservation 以下 ARC）が発会した。そのネットワークにはその後、神道（2000 年）、ゾロアスター教（2000 年）、儒教（2013）も加わって 12 宗教が参加する世界的ネットワークとなった。神道においては 2014 年、伊勢神宮および近隣施設を利用して ARC との共催による国際環境保全会議を開催している(2)。

ARC は発会後 2019 年までの 23 年間にわたって、世界の様々な宗教の環境運動企画、実行等を支援するとともに、各宗教と国連環境計画、国連開発計画、世界銀行等の国際機関との共同プロジェトの推進等における仲介役を果たした。

なお前稿と同様に本稿における声明文および参照する海外出版書籍および関連書面の原文のほとんどが英文であり訳書・訳文がないことから、これらの引用部分のほとんどが、著者の翻訳によるものであることをあらかじめご容赦いただきたい。

1. バハーイー教

バハーイー教は、19 世紀なかばにイランにおいてイスラム教と袂を分かったバーブ教を基盤にして、バハーオッラーによって創始された一神教であり、20 世紀以降世界的に拡張し、現在は 200 以上の国、地域に公称 500

万人を超える信者を有する。

バハーイー教のウインザー声明は、バハーイー教本部の環境部が世界中のバハーイー教社会を代表してまとめたものとしている。

⑴ バハーイー教の世界観・自然観

ウインザー声明文におけるバハーイー教の世界観・自然観には次のような内容がみられる。

> バハーイー聖典は、自然を神の意志の発出と説く。自然はその本質において、我が名（My Name）、製作者（the Maker）、創造者（the Creator）を体現したものである。その表現はさまざまな原因により多種多様で、この多様性の中に、眼識のある人のための徴しがある。自然は神の意志であり、不確定な世界における神の意志の表れである。それは全知全能の任命者（the All-Wise）の任命者によって定められた神の摂理である。［Edwards and Palmer 1997: 52］

> 自然を神の体現として、神の意志の表れとして理解すると、自然界に対する深い畏敬の念が湧いてくる。［Edwards and Palmer 1997: 52］

> （生物）多様性は完全さの本質であり、栄光なる神の与え賜いしものの現れである・・・この多様性、この違いは、まるで自然に創造されたかのごとくであり、あるいは人の手足や器官が一つとして同じでないようなものである。なぜなら、それぞれが全体の美、能力、完全さに貢献しているのだから…。庭にあるあらゆる花や草木、葉や果実、木の枝や幹が皆同じ形で同じ色だとしたら、なんとも味気ないであろう。色合い、形の多様性が庭を豊かに飾り、その効果も高める。［Edwards and Palmer 1997: 53］

これらの内容からは、バハーイー教においては、自然は神の体現そのものであるとする考え方であり、あらゆる創造物にみられる多様性こそが神による創造物の完全さの本質すなわちすべての創造物が何一つ欠けることなく存続することが神そのものの姿であるとしていることが読み取れる。

⑵　環境保全に関わる人間観・人間の使命

バハーイー教において、上記の世界観に基づく人間と自然との関係は、下記のような声明文のから読み取ることができる。

> バハーイー教の環境保全と持続可能な開発に関する原理の中では、以下がとりわけ重要である。
>
> ・自然は神の本質と資質を体現するものであり、したがって大いに敬い、慈しむべきものである。
>
> ・万物は相互に関係しており、相互依存の法にしたがい繁栄する；そして、
>
> ・人類が一つであるということは、私たちの時代を形造る基本的な宗教的・社会的真実である。［Edwards and Palmer 1997: 52］

> 神の寵愛を受けた人間が慈悲と慈しみの心をもって扱わなければならないのは、人間だけではなく、むしろ生きとし生けるすべてのものに究極の慈愛を示さなければならない。［Edwards and Palmer 1997: 53］

> 自然に対する畏敬の念は、バハーイー聖典全編に織り込まれた夥しい量の比喩的言辞により、更に強化される。自然は大いに重んじられ、尊重されるが、崇拝されたり崇敬されることはない。むしろそれは、神により人間に与えられた目的にかなうものであり、人間が文明を永遠に進歩させる目的に資するものである。この意味においてバハーイー教は、厳密にいえば生命中心主義でもなく人間中心主義でもなく、むしろ神の啓示を中心とする神中心の世界観を推進する。人間はこの地上界において神の意志を実現するために努力しており、したがって、自然の受託者（trustee）または財産管理人（steward）である。［Edwards and Palmer 1997: 52］

> バハーイー聖典は、地球の膨大な資源と生物多様性の受託者として人類は、“未来世代の遺産” の保全に努め、自然の中に神意を読み取り、人類は一つであるとの私たちの時代の基本的な真実によって導かなけ

ればならないと説く。我々が持続可能な生活パターンを確立するためのスピードと設備は、神への愛と神の法を順守しながら、私たちが、最も進んだ文明のプロセスの中で、どこまで建設的に貢献できるかにかかっている。［Edwards and Palmer 1997: 56］

上記の内容から、唯一神の創造によるこの世界の中で、自然は人間が神の受託を受けて進める文明の進歩に資するものであるが、だからといってそれは人間中心を意味するものではなく、神中心の世界観に基づくものであること。また、人間は神の創造した自然の財産管理人であるとする立場をとっている。この立場は、アッシジ宣言におけるユダヤ教、キリスト教、イスラム教と共通するものがみられる(3)。

また、バハーイー教の自然観に関わる先行研究については、R.R.ハーツによれば、バハーイー教徒の多くは他の宗教から転向したものであり、他の世界宗教と比べた場合にグローバルな視点を持っているとしていることからも、上記の声明文にある「人類は一つであるとの私たちの時代の基本的な真実によって導かなければならない」［ハーツ 2003(2002): 23］といった、全人類を包括的にとらえた幅広い視点を持って、環境保全運動に向かおうとしている点は、バハーイー教の成立が近代であるがゆえに備えた特徴の一つと言えるのではないだろうか。

2. ジャイナ教

ジャイナ教は、古代の東インドで成立し、今日も存続するインドの民族宗教でアヒンサー（不殺生）を至高の倫理（パラマ・ダルマ）と位置づけ、これを厳格に実践することを特徴としている。

ウインザー声明文においては、文頭にジャイナ教の紹介が書かれており、それによればジャイナ教は現存する最古の宗教の一つであり、ジャイナ教徒という言葉は、全知を獲得した人間の教師たちであるジナ（霊的勝利者たち）の弟子たちを意味するとある。また、これらの教師たちはティールサンカラ（Tirthankara）（渡場を作る者）と呼ばれ、輪廻のサイクルから離脱することを助けるとある。

また、第 24 祖のティールサンカラであったマハーヴィーラが紀元前 599

年に生まれ、彼が第 23 祖のティールサンカラの教えを集成し、信仰の基盤をまとめたとされている。

ウインザー声明文はジャイナ教学研究所（Institute of Jainology）を代表して、学識者であるとともに当時インド政府の高等弁務官でもあった L.M.シンヴィがまとめている。

⑴ ジャイナ教の世界観、自然観

ウインザー声明文の中でジャイナ教の基本教義として挙げられているものの中には以下のようなものがある。

① ローカ（宇宙 Loka）

空間は無限であり、宇宙として知られているものはそのわずかな部分に過ぎない。宇宙に存在するものは、知覚力のあるものジーヴァ（Jiva）であれ、知覚力のないものアジ―ヴァ（Ajiva）であれ、全て永遠である。しかし、物となる形は束の間の存在である。ジャイナ教においては、全ての人間が、宇宙の幸福を推進する義務があることを説き、それを実践している。［Edwards and Palmer 1997: 92］

② ジーヴァ（霊魂　Jiva）

生きるものはすべて、原子の集合体である体の中に個々の霊魂（ジーヴァ）を持つ。生き物が死ぬと霊魂は体を離れ、ただちに他の世界で誕生する。涅槃に達し、その結果、輪廻を終わらせることが、ジャイナ教の実践の目的である。［Edwards and Palmer 1997: 92］

③ アジ―ヴァ（非霊魂　Ajiva）

アジ―ヴァは、宇宙に存在する知覚力のないものすべてであり、物質、運動と静止の媒体、時間、空間を含む。［Edwards and Palmer 1997: 92］

④ パラスパロパグラーハ　ジバナム（生命の相互支援・依存 parasparopagraha Jivanam）

生命はすべて相互支援と依存により結ばれている。これはジャイナ教の標準的な聖典であるタトゥヴァルタ・スートラより抜粋した格言

である。自然のあらゆる側面は一体であり、形而下および形而上の関係において結び付いているという基本教義を強調することにより、現代の生態系の範囲を定義している。［ウインザー会議配布資料 1995］

ジャイナ教の世界観にある生命がすべて相互支援、相互依存によって結ばれるという思想は、前稿の仏教における、内と外の全ての現象、心とその周りの環境は分かちがたく、相互に依存し合っているという教えとの類似性がみられる。

また、仏教とジャイナ教が、それぞれが有する五戒のうち 4 つが共通するといったように、修行者像の在り方などについて似通った教えを有していることに関して上田は、釈迦もマハヴィーラも「同時期、同地域、つまり紀元前 5~6 世紀（現在のビハール州付近）活躍したとされている。そして両者は共に、当時主流であったヴェーダ聖典の権威とそれを背景とするバラモン、クシャトリア、ヴァイシャ、シュードラの 4 つの階級からなる序列を認めずに独自の思想を展開し、大きな教団を形成するにいたった」［上田 2017: 10］と、両者が反バラモン主義的な思想背景を共有していたからだと考えられるとしている。

因みにジャイナ教と仏教の双方における五戒とは、不殺生（生き物を傷つけない）、不妄語（嘘をつかない）、不盗（盗まない）、不淫（性的品行）の 4 戒に加えて、ジャイナ教においては不所得（所有しない）、仏教においては不飲酒（飲酒をしない）となっている［岸本編 1965: 148］。

また、ジャイナ教における、生きるものはすべてが個々の霊魂（ジーヴァ）を持つという教えは、ウパニシャッドにある「ヒンドゥー教徒は、あらゆる植物と動物に、魂があると信じている。食物とするために植物や動物を殺生することさえ、罪業消滅の苦行をしなければならない行為である。」［Edwards and Palmer 1997: 75］としたヒンドゥー教の伝統を引き継いでいるようにも見える。

インド東部という同じ地域における仏教、ヒンドゥー、ジャイナ教という 3 つの宗教の教義に共通する思想が感じられる。

⑵　環境保全に関わる人間観、人間の使命

ジャイナ教においては、人間観の基本として仏教と同様に、カルマによる

輪廻転生、また、輪廻から霊魂を解放する解脱を目標としており、声明文において以下のような人間観を表現しているとともに、人間と自然との関係については、アヒンサー（Ahimsa）（不殺生）を最も大きな特徴としている。

① カルマ（輪廻転生 Karma）

カルマは、人間の体、言葉、心の動きの結果として霊魂に付着する一種の捉えがたい物質として理解されている。カルマが蓄積されることにより、霊魂が輪廻転生に縛り付けられることになる。［Edwards and Palmer 1997: 93］

② モクシャ or ニルバーナ(解脱もしくは涅槃　Moksha or nirvana)

生命の究極の目的は、霊魂を輪廻から解放することである。すでに蓄積しているカルマを全てなくし、さらに蓄積することを防ぐことで、これを達成し得る。解脱（moksha）に到達するためには、世界観、知識、行動の面で悟りを開かなければならない。［Edwards and Palmer 1997: 93］

③ アヒンサー（不殺生　Ahimsa）

これは基本となる誓戒で、ジャイナ教の伝統を金の糸のように貫いている。これは人間のみならず、自然界にある物すべてについて殺したり、故意に傷つけることを禁ずるものである。すなわち、植物や動物をふくむ全ての生命を敬うことである。ジャイナ教徒は、日常生活において全ての生命への同情心（Jiva-daya）を実践する。［Edwards and Palmer 1997: 91-92］

ジャイナ教における自然環境保全につながる教えはまさにアヒンサー（Ahimsa）（不殺生）による生きとし生けるもの全てを傷つけない思想とその実践の徹底にみられると言えよう。上田によれば、「ジャイナ教の出家修行者の生活は不殺生の徹底という要素を抜きにしては語ることはできない」［上田 2017: 28］とし、不殺生は、五戒の中でも最も重視される項目であるとしている。

また、Shar と Deshwal によれば、不殺生戒は単に行為そのものに関する聖戒ではなく、心、言葉、行為のすべて、またその対象も植物、動物、人間といった全ての生きとし生けるものを対象にしていると述べている。

ジャイナ教の信条では、アヒンサーは野生動物保護における中心的な考え方である。ジャイナ教はアヒマの倫理を説いているが、それは次の 5 つの留意事項によって実践できる。「言葉を維持すること（Vagupati）、心を維持すること（Manoguputi）、歩くことに留意すること（Irya）、物を拾ったり置いたりするのに留意すること（Adna-niksepana）、飲食することに留意すること（Alokitapana-bihojana）（Dounda、2002 年）。ジャイナ教は、暴力には肉体的、言語的、感情的なものがあることを認識しており、アヒンサーの教えは人間のあらゆる行為に関係し、植物や動物、人間などすべての生き物に感情移入することを公言している。」［Shar and Deshuwa 2023: 281］とある。

この一つの例として、ジャイナ教においては修行者の菜食主義もその特徴としてあげられるが、これはジャイナ教においては、生命体は可動の物（動物など）と不動の物があり、植物は不動の生命体のカテゴリーに含まれている、したがって「植物を食べることも生き物を害することに他ならないのである」［上田 2017: 32］とされているからである。修行者は、托鉢によって自ら食物の命を害することがないために、不殺生主義との整合性を保っていると上田は説明している。

また、ジャイナ教では在家信者においても出家修行者のように完全な形での実践はできないものの、上記の５つの聖戒に準ずる日々の生活を営むことを基本としているという。

ウインザー声明文においては、不殺生の聖戒にのっとり、「ジャイナ教徒は、日常生活において全ての生命への同情心を実践する」［Edwards and Palmer 1997: 92］との決意が表されている。

3. シク教

シク教は､インド大陸において 15 世紀にヒンドゥー教を基盤にしながら、イスラムの要素を取り入れた宗教とされており、開祖はグル（法主）・ナナーク（1469－1539）である。また、十代目のグルであったゴービンド・シン（1675-1708）が、それまでの歴代のグルによる教えをまとめた「グル・グラント」を聖典として定め、その後は人としてのグルの継承は廃止し、この聖典をグルとすることを定めた歴史がある。

シク教は、偶像崇拝を禁止し、唯一永遠なる神の存在を説き、階級差別、人種差別の廃止を訴え、現在は、インドのパンジャーブ州を中心に、世界各地に約 2,800 万人の信徒を擁する。

シク教のウインザー声明文は、シク教において第二の巡礼地といわれるアナンダプールの指導者であるマンジット・シン師の指導のもと、黄金神殿で知られる第一の聖地アムリッツェルでまとめられたものとしている。

声明文の冒頭に「世界を創造した神は、世界を霊性修行の場とされた」（Creating the world, God has made it a place to practice spirituality）という「グル・グラント」の一節を冒頭に掲げている。

後述するが、この句は、シク教の環境保全に関する姿勢を一言にして表しているかのような聖句に思われる。

⑴　シク教の世界観、自然観

シク教においてはこの物質界の創造について次のように述べている。

> 物質宇宙は神の創造物である。その起源は神にあり、その終わりは神の中にある。そして、それは神のフカーム(託宣)の中で運営されている。グル・ナナークは、神だけが地球の創造の理由と瞬間を知っていると宣言している。宇宙の起源は知ることができない。原初の原子の創造という創造行為そのものが、神の意志によって瞬時に引き起こされたのである。［Edwards and Palmer 1997: 113］

また、これに続く宇宙の説明は宇宙の始まりの前にあった不確定な空白を描写しており、それが最近の科学的研究の結果と驚くほど符号するとしている。

引き続いて、次のように世界観が描かれている。

> 神が宇宙と世界を創られたのは、神が一番よくご存じの理由からである。そして、神の行いの結果として、宇宙のすべての部分が聖なるものとなった。神は、被造物のさまざまな要素を通して現れる、すべてを包含する存在である。
>
> この宇宙と世界を創造した神は、それらを指揮している。すべての行動は、神のフカームの中で行われる。神だけが、どのように、そしてな

ぜそうするのかを知っている。しかし、神はこの広大で巨大な劇場を指揮するだけでなく、優しく見守っているのである。［Edwards and Palmer 1997: 113］

上記の宣言の中にあるフカームとは、「神の命令」または「神の意志」という意味を表すアラビア語であるとのことである［高橋訳 シング 1993: 85］。

また、「神だけが地球の創造の理由と瞬間を知っている」との表現にあるように、シク教においては、人間には何のために地球が創造されたのかという神の意図までは知りえないという思想、人間はあくまで神のもとにあってひたすら帰依する存在であるとする思想が見える。ただし、その一方で、創造の意図は分からないまでも、人は地球とどのように関わりを持てばよいのか、については理解できるとして、次のように解釈している。

⑵ 環境保全に関わる人間観、人間の使命

シク教の世界観を踏まえた人間の自然環境に関する役割について、ウインザー声明文では次のようにまとめられている。

> 生き物はすべて相互に関係している。人間の体は多くの部分から成っており、それぞれの部分に名前があり、それらはあるべき場所に備わっており、特有の機能をもっているが、すべてが相互に依存している。同様に、この宇宙と地球の構成要素も、すべてが相互に依存しているのである。一国もしくは一つの大陸での決定事項を他が無視することができないである。ある場所でなされた選択は、世界の他の部分に大きな影響を及ぼすのである。皆一つのシステムの部分を成しているのである。
>
> 生命が存在し、成長するためには、豊かな自然に依存せざるを得ない。人間は地球から生きる糧を得なければならず、したがって、地球を消耗させ、枯渇させ、汚染し、焼き、破壊してはならないのである。シク教は、地球の健全さを維持し、人間が生存し続けるためには、人間と環境の間の神聖な関係を認識することが必要であると信じる。豊かな自然が提供する資源を保存し、賢明に利用することに専心することを目指した新しい「環境倫理」は、古来の、時の試練に耐えた真実の霊的遺産

を誠実に理解することでのみ、生まれるのである。［Edwards and Palmer 1997: 120］

また、シク教では個々の人間のありようについて以下のように声明文に記している。

神が創造したこの世界に、神はすべての種や人間にたいして、それを助け、養うすべも用意した。

シク教では、生命と自然に対する取り組みの中に環境問題を組み込んでいる。全ての創造物は同じ起源と終焉を持つがゆえに、人間は創造物全体の中における自らの位置を自覚しなければならない。人間は生涯を通じ、愛と慈悲と正義を実践しなければならない。神と一体となり調和するということは、全ての創造物と協調しながら生きることを意味する。

次に、シク教の倫理規範に従いながら、一方では積極的に社会に参加する人間は、さらなる精神的成長を遂げることができることである。シク教で重要なのは、物や物質的の存在を否定しない中にあっても、精神が物質にまさるということを持ち続けることである。人間が修道生活に入ることを求めてはいない。普通の社会生活を営み、自らがこの世で果たすべき責任を全うしなければならない。人間は贅沢を否定し、簡素な生活を維持するべきである。人がさらなる精神的向上を図るためには、グルの指導に則り自らに打ち克つことである。重要なのは、自らを征服し、自らを発見することであって、他の存在である自然を征服することではない。シク教は、人目を引く、浪費的生活をしないことを教えている。グルは、人間は有用な物質的および文化的資源の思慮分別のある利用を勧めている。［Edwards and Palmer 1997: 114］

声明文の冒頭に「世界を創造した神は、世界を霊性修行の場とされた」という「グル・グラント」の一節が掲げられていると述べたが、上記の声明文にある「時の試練に耐えた真実の霊的遺産を誠実に理解すること」、「物や物質的の存在を否定しない中にあっても、精神が物質にまさることを持ち続けることである。」との表現にあるように、シク教においては、地球における人間としての自然との関わり方として、自然に対する霊的理解、見えない

精神世界を重要視することを促しているように見える。

シングは、シク教の聖典「グル・グラント」には、ユダヤ教やキリスト教のバイブルに見受けられるような歴史的な記述や伝記的記述はなく、いかなる教義をも提供していない、また行動に関する戒律や義務も規定していない、としている。

それでは何を提供しているかと言えば、それは「シク教の聖典は、精神的に昇華された詩だけから出来上がっている。そのテーマは、個人による“絶対真理”の希求なのである。」［シング 1993: 71］としている。“絶対真理の希求”とは言い方を変えれば上記の「世界を霊性修行の場」と見ることにつながるものであろうから、シク教においては、人と地球との関わり方は、創造物に対して「愛と正義と慈悲」を実践することであるが、その真の願いは個人の霊的な高まりであることを表していると言えよう。

シングはまた、シク教が一神教と言われながら人格神を持たないとの特徴については、「シク教は偉大なテーオス、すなわち人格神を認めていない。シク教の真理とは、もちろん“唯一なるもの”なのである。しかし、それはいかなるイメージや形を有するものではないのである。」［シング 1993: 83］と語っている。

シク教が個人に対して、人格神への帰依ではなく、神として表わされる絶対真理への探究の道を進めていたこと、世界をまさに「霊性修行の場」としていたことは、真理を希求する出家修行に重きを置く仏教やジャイナ教の人間観とも、一種の相通ずる思想が見られる。

4. 道教

道教の声明文は中国・北京の白雲寺（White Cloud Temple）に本部のある中国道教協会（Chinese Taoist Association）によって作成された。はじめに道教の概要の説明から入っている。

それによれば、道教は紀元前 770 年から 221 年にかけての諸子百家と呼ばれる時代に形成され、後漢（紀元前 25 から西暦 220 年）に道教の集団が正式に作られたとある。

道教は、このように約 2000 年の歴史があり、1995 年においてもなお、中

国全土で 100 前後の道教信徒協会、1000 以上の道観（寺院）が一般に門戸を開いており、1 万人前後が道教寺院で生活しているとしている。また道教は、中国人の考え方や行動に多大な影響を及ぼし、現在もなお一人ひとりの中に、また、潜在意識として道教が多かれ少なかれ何かしらあると言えると紹介している［Edwards and Palmer 1997: 125］。

そうした紹介の上で「道教にも世界的宗教の例に洩れず、宇宙、人間の生活、徳目、究極の目的について道教独自の観点がある」として、世界観、自然観、人間観等の説明に入っている。

⑴　道教の世界観・自然観

声明文では道教の教えは大きくは二点に集約できるとしている。一つは何にもましてタオ（Tao――道）を尊ぶことであり、もう一点は生命に大きな価値を置くことであるとしている。

「何にもましてタオを尊ぶ」（Give respect to the Tao above everything else）の内容について声明文では次のように述べている。

> タオ（Tao）とは、一言で言えば“道（the way）”を意味する。タオは全ての物事の起源であり、道教徒にとっての究極の目標である。これが道教の最も根本的な教義である。タオは、天と地と人にとっての道である。タオは祖母女神（Grandmother Goddess）の形をかりていた。彼女は人間に悟りをもたらすためにこの地上にやってきた。彼女は万物の成長を妨げないで、万物が己の方向性のままに成長するように任せなさいと教えた。これが、不作為、利己心のない道と呼ばれるもので、道教信徒にとって重要な原理の一つである。これは人々に、気取らず、おごらず、日常生活の中で自己の利益のために他人と争わないことを教えている。このような美徳が、道教信徒が求める理想的な霊的王国の美徳である。［Edwards and Palmer 1997: 125-126］

また、もう一点の「生命に大きな価値を置くこと」については次のように述べている。

> 道教は不滅を追い求める。道教では生命を最も価値あるものとみなす。Chang Daoling 師（紀元 2 世紀）は、生命はタオのもう一つの表れ

であり、タオの研究の一つは人の命をいかに伸ばすことができるかの研究であると言った。多くの道教信徒は、この原理を念頭において、生命の延長の研究を積んできた。道教信徒は、生命は天が支配するものではなく、人間が支配するものだと信じている。人は瞑想と訓練によって生命を伸ばすことができる。訓練には、道徳面と実際面がある。人は意志を鍛え、利己心を捨て、名声を追わず、良い行いをして、美徳の手本となるよう努めるべきである。［Edwards and Palmer 1997: 126］

道教がその名のとおり「道（タオ）」を最も尊ぶものであることについて、村上嘉実は「道教の絶対者は神ではない。道教にも神々はたくさんあるが、真の絶対者は道である。道は宇宙の生命の根源であり、万物の生みの母である」［村上 1983: 300］と述べているとおりであり、それが声明文においてもはっきり述べられている。

また、生命に大きな価値を置くことについて、声明文の中に「人の生命をいかに伸ばすことの研究」「生命の延長の研究」と表現されているのは、言うまでもなく神仙思想、不老不死を求める神仙道の実践を意味していると思われる。山田利明は「不老不死の神仙はかつての中国人のあこがれであった。人々は神仙になるためにあらゆる手段を使った」［山田 1983: 331］と、神仙思想が中国全土を風靡する思想であったことを説明している。

⑵　環境保全に関わる人間観、人間の使命

ウインザー声明文においては、道教における人間と自然との関係についての原理は 4 点あるとしており、以下のように述べている。

ⅰ　道教の基本的な古典“道徳経”にこのような詩がある――“人は地に従い、地は天に従い、天はタオに従い、タオは自然なるものに従う”。これは、全ての人間は地を尊び、地の動きの法則に従くべきであるという意味である。地は天の変化を尊ばなければならず、天はタオに従わなければならない。

そしてタオは万物の発展の自然の成り行きに従う。ゆえに、我ら人間が自然に対して為しうることは、万物が自ずからの過程で成長していくことを助けることであることが分かる。我々は、自然との関係においての無作為であること、自然のあるがままに任せるよう人々の心に植

え付けなければならない。［Edwards and Palmer 1997: 127］

ii　道教では、陰と陽の二つの相反する力で万物が成り立っているとする。陰は女性、冷たいもの、柔らかいもの、その他を、陽は男性、熱いもの、堅いものを示している。万物の中でこの二つの力が常に争っている。二つの力が調和に達すると生命のエネルギーが創り出される。このことから我々は、自然にとって調和がいかに大切かを理解するだろう。これを理解する人は物事を賢く理解し、賢く行動する。だが、そうでない人はたぶん自然の法を侵し、自然の調和を破壊するだろう。（中略）人間と自然の関係を表面的にしか理解しない人は、危険を意に介することもなく自然を利用するだろう。この関係を深く理解する人は、自然を良く扱い、自然から学ぶだろう。（中略）自然を過度に利用すれば、長期的にみて荒廃を、否、人類の滅亡さえ招くのは明らかである。［Edwards and Palmer 1997: 127］

iii　人間は自然の持続力の限界に十分配慮して、自らの発展を追求する上での成功の基準を持たなければならない。自然の調和と均衡を破る方向で進めるなら、たとえそれが一時的に大きな利益をもたらすとしても、自然からの罰を防ぐためには、それを行わないことである。人間が過度の欲望のままに生きれば、それは天然資源の過度の搾取につながる。よって人は、過ぎたる成功は、後退への道であることを知らねばならない。［Edwards and Palmer 1997: 127-128］

iv　道教は、豊かさというものの判断を、種の種類の多さで判断するという独特の価値観を持っている。万物が良く成長するとき、社会は豊かなコミュニティとなる。そうでなければこの大国は衰退への道を歩むことになる。このような考え方は、政府や国民に自然を大切にすることを教えるものである。この考え方は、自然保護に関する道教独特の貢献である。［Edwards and Palmer 1997: 128］

ここに表現されている人と自然との関係は、自然に対する人側からの無作為、自然との調和、それによって万物が豊かな世界を作ることが人間の役

割であるとしている。道教における人と自然との関係について村上も「神秘主義によって大自然と融合することは、自然を征服ことではない。ひたすら自然の法則に順うことによって、自然の法則と一体となって、その機能を動かすのである。この点が西洋の自然観とは違う。」［村上 1983:300］というように、道教は、まさに自然尊重、自然順応を説いている。

しかし、その一方で人間自身の不老不死を自らの力で切り開こうとあらゆる力を傾注してきた歴史は、生命の延長に関してはどこまでも人間力をもってするという姿勢が見え、自然順応、無作為な姿勢と言いつつ、一種の矛盾とも感じられる姿勢に見えなくもないと感じるのは著者だけであろうか。

5. ９宗教における人と自然との関わりの傾向について

ここまで 1995 年のウインザー声明文における 4 宗教の世界観・自然観、自然と人間との関わりについて、その特徴を見てきた。

もちろん、これらの内容は、各宗教におけるそうしたテーマの全てを網羅したものではなく、個々に関する内容だけでも多くの研究が必要であることはいうまでもない。

ただ本稿においては、現代社会における焦眉の急とも言うべき地球環境保全問題にたいして 4 宗教が真摯に向き合う中で、教義に照らして、どのような姿勢をもって向かおうとしているのかを、環境保全が主題となったウインザー声明から理解することに試みたのであった。

しかしここで、本稿では記述していないがアッシジ宣言における 5 宗教と本稿でとりあげたウインザー声明の 4 宗教の両方を含めた 9 宗教をながめると漠然としたものではあるが、共通点を有するものとそうでないものとの傾向が見えてくることから、その点について気付くことを数点あげてみたい。本稿で触れていない 5 宗教の教えについては、その都度典拠を示しながら記述したい。

⑴ 神の創造物の財産管理人（steward）としての人間の役割に重きを

おく宗教

ウインザー声明文を発した 9 宗教のうちバハーイー教、キリスト教、イスラム教、ユダヤ教、シク教は一神教と言われるが、これらの宗教の中で、バハーイー教においては、人は地球の保全に関して神の命を受けた受託者（trustee）であり財産管理人（steward）であるとしている。また、キリスト教においても、財産管理人（steward）という言葉が使われているほか、奉仕者（priests）、神との共同創造者（co-creator with God）と表現されている。［Edwards and Palmer 1997:69］また、イスラム教においても、既にアッシジ宣言において地球上の財産管理人（stewards）であり代理人（agents）であると表現されている［Edwards and Palmer 1997:46］。

さらに、ユダヤ教においても、アッシジ宣言において管理人（custodian）［Edwards and Palmer 1997:46］と表現されている。

また、シク教にも財産管理人といった表現はないが、「地球の健全さを維持」し、「人間と環境との神聖な関係を認識する」こと、「豊かな自然が提供する資源を保存し、賢明に利用することに専心すること」であるとしているのも、同様の意味合いと受け止めてよいと思われる。

このように一神教においては、表現の違いこそあれ、内容的には、人間は神の創造した地球という財産の管理者としての役割に重きを置いていると大枠捉えることができよう。

なぜ人間はそのような役目を担っているのか、それは当然であるが、例えばイスラム教の声明文においても、「人間は考える能力があるがゆえに、その“均衡を破ることのないよう”正しく行動する責任を有している。」［Edwards and Palmer 1997:86］とあるとおり、神の創造物の中で人間のみが自由意志をもって世界に働きかけることができる存在である以上、仮に神の目からすれば、人間以外に財産管理を任せることのできる存在はないということであろうし、人間側としても地球環境問題を目の当たりにして、神からそのような付託を受けていると解釈することは容易に想像できる。

しかし、一神教においても様々な違いがみられるのも事実であり、例えば同じアブラハム由来の宗教（Abrahamic religions）といわれるユダヤ教、キリスト教、イスラム教の中においても、イスラム教は、ユダヤ教やキリスト教に比べて、人間の立ち位置が、トゥヴォルシュカの言う、「コーランが人間

と自然を切り離すことを拒否することによってイスラム教は宇宙を統合する視点を守った」［クレッカー、トゥヴォルシュカ 1999(1986): 82］のとおり他の 2 宗教ほど自然から分離した関係として考えられていないように見えることは、既に指摘したとおりである。(4)

この、イスラムの自然観は、むしろ「神と一体となり調和するとは、全ての創造物と協調して生きること」とするシク教や、「自然は神の本質と資質を体現するものであり、したがって大いに敬い、いつくしむべきである。」「万物は相互に関係しており、相互依存の法に従い繁栄する」とするバハーイー教の自然観に近いものが感じられる。これらイスラム教、シク教、バハーイー教の三つの宗教は、同じ一神教ではあるが、神と自然との連続性をもったつながりがより密であるように感じられる。

⑵ ヒンドゥー教、仏教、ジャイナ教、道教の自然観の類似性

次に９宗教の中でいわば多神教とされるヒンドゥー教、仏教、ジャイナ教、道教の４つの宗教については何等かの共通点が見られるのであろうか。

これらの中で、すぐに気づくのは、仏教とジャイナ教の類似性といえよう。これらの 2 宗教は、発祥地および発祥の時期がほぼ重なるという時間的な類似もさることながら、前述のように共にカルマによる輪廻からの解放を目指すなかで、出家修行に関して、共に五戒を説いているがそのうちの 4 つは共通であることが注目でき、特に不殺生戒からは、動物保護、またジャイナ思想によれば植物の保護にもつながる自然保護思想であることを記した。

また、ヒンドゥー教の「宇宙の万物に神をみる」［Edwards and Palmer 1997:74］というウインザー宣言にある見方と、ジャイナ教において「生きるものはすべて個々の霊魂を持つ」という思想、さらに、道教における「全ての人間は地を尊び、地の動きの法則に従うべきである」という表現、また仏教における万物のつながりを表す縁起の思想も、自然界を尊重する教えといえよう。

また、ウインザー会議には参加していないが、森羅万象を神々のはたらきとして享受する神道も、あえて言うまでもないが自然尊重の思想が根幹をなしていると言えよう。

こうしてみると一神教以外の 4 宗教（神道も含めれば 5 宗教）は、自然尊重、人間生活と自然との調和は共通の観念、行動規範になっていると言える

のではないだろうか。

ここでこれらの 4 宗教（神道を含めば 5 宗教）について、地理的な特徴に気づく、これらの宗教は、どれも発祥地が南アジアまたは東アジアというアジア地域にあり、その自然環境と宗教思想の形成との関連性についても何等かの特徴が見えてくるのではないかと想像される。

なぜなら、これらの地域は大きくはモンスーン地域とされる地域で、亜熱帯から温帯にわたり、台風やサイクロンといった自然の脅威の影響をうけながらも、年中樹木が茂り、動植物が息づき、いわば自然界の恵みの豊かな地域を含んでいることであり、和辻哲郎が、モンスーン気候地域においては「大地は至るところ植物的なる“生”を現し、従って動物的なる生をも繁栄させるのである。…自然は死ではなくして生である」［和辻 1979:36］とし、また一方で中東をはじめとする砂漠のある地域については、「砂漠において自然は死である。生は人間の側にのみ存する。従って神は人格神たらねばならぬ」［和辻 1979:36］としていることとの関連性に興味を抱くのは筆者だけではないのではなかろうか。世界の宗教の発祥地と宗教思想の関係については、次なる課題として研究していきたい。

⑶ 聖典にない環境問題への対応を迫られた宗教界

また、最後に宗教が環境問題についての何等かの回答を求められたとも言えるアッシジ会議およびウインザー会議は、宗教にとっては、現代的な新たな課題に対する解釈と姿勢を示すことになったと思われるが、宗教としての見解を示すについては、それぞれが、経典や教義に求めて解釈し記述しているのが分かる。

しかし、その過程で、教典、教義に環境保護に直接つながるものが元来存在していた宗教と、そうでない宗教との、環境保護に関する声明文を考案するうえでのプロセスの違い、平たく言えば苦労の度合いに差があったように感じられる。

ジョン・ハートは編著 *Religion and Ecology* の中で、「世界中において 21 世紀になると特定の宗教のメンバーは、（中略）、例えば有神論者たちは、何百年または何世代も前から伝わる宗教的生態系に関わる教示を発見または再発見するか、あるいは古くからの教えではなく、ここ 100 年または 10 年前位からの教えから、新たに形成または再形成することとなった」［Hart 2017:

Preface 1］としている。

9 宗教を概観するに、元来自然界の中に神なり神秘性を見出していたり、自然に親和的な経典や思想を有するヒンズー教、仏教、道教、ジャイナ教といった宗教は比較的容易に見解を示すことができたのではないだろうか。

それに比べて、一神教、中でも旧約聖書を共通の教典とするアブラハムの宗教と言われるユダヤ教、キリスト教、イスラム教、さらにはその中でも新約聖書を教典とするキリスト教においては、聖書の記述の中から自然保護思想の根拠を見出す過程での苦労が感じられる。

具体的には、キリスト教のアッシジ宣言およびウインザー声明においては、ルカによる福音書にある、「5 羽の雀が 2 サリオンで売られているではないか。だがその一羽さえ、神がお忘れになるようなことはない」（ルカ・12・6）といった一節の引用が、聖書からの数少ない引用文として示されている。それは、その後 30 年を経た 2015 年に発布されたローマ教皇の回勅「ラウダ―ト・シ」においても取り上げられているが、このルカ伝の一節の直後には「恐れることはない。あなたがたは多くの雀よりもまさったものである」（ルカ・12・7）とあり、人間の優位性を主旨として読み取るのが自然と思われる。

また、「ラウダ―ト・シ」において、神の自然界へのまなざしとしてイエスが発した言葉は、このほかには「空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる」（マタイ・6・26）を含む数例のみである。

ここで考えられるのは、宗教が新しく創始される場合は、始祖なり創始者と言われる人々は、その時代の問題点を指摘し、声を上げ、その解決策を唱えてきたとも言えるのではないだろうか。例えばキリストやムハンマドが人間間の平等を説いたのは、ユダヤ教の選民思想へのアンチテーゼであったであろうし、ブッダやジャイナ教のマハヴィーラ、シク教のグル・ナナークがカーストの身分制度に異議を唱えたのも、そうした身分制度に問題がある社会であったからではないかと想像される。したがって、もし当時何等かの人間の営みによって大規模な環境破壊が起こっていたなら、これらの教祖・始祖もなんらかの声を発したであろうと想像される。

キリスト教を例にあげた類推ではあったが、各宗教、特に世界宗教と言われる宗教においては、時代の進展に合わせて、その時代の課題への対応を示

しつつ、今日まで歩み、さらに未来へと進もうと努力する姿を垣間見た思いである。

1972 年の国連人間環境会議（ストックホルム会議）において地球環境問題が世界共通の問題として明確になって以降、各宗教においても環境保全に関する見解を示し、環境保護運動に取り組むことによって、自らの今日的かつ公共的な存在価値の一面を示しつつ今日に至っていると言えるのではないだろうか。こういった時代の要請とそれに伴う宗教の変化といったテーマも今後のテーマの一つとして検討していきたい。

おわりに——各宗教による具体的活動の発展へ

本稿においては、1995 年のウインザー会議における 9 宗教の声明文の中から、バハーイー教、ジャイナ教、シク教、道教の自然観および自然と人間との関係を中心に見た。

なお、付け加えれば、ウインザー会議では、上記のような理論的な議論だけではなく、それぞれの宗教が、実際にどのような環境保全運動を行っているのか、また、その後行っていくのかについても語り合いがあった。

また、ウインザー会議を機に各宗教が、ARC の助言を受けながら、それぞれの現状に適合した新たな環境保全活動を活発化させ、その結果として 2009 年に再びウインザー城に集合し、その折には、ARC と国連環境計画（UNDP）との共催で、各宗教が環境保全に関する長期計画（7 年計画）を披歴し合った。それらの内容については、改めて検討を加えたい。

ただ、その折に示された長期計画の特徴としては、各宗教が、ⅰ動植物ならびに山、河川、海等の自然保護、ⅱ教義に基づいた環境教育の幅広い実施、ⅲ 聖職者および未来をになう青少年に対する環境教育の実施、ⅳ教会その他の施設運営におけるエネルギー節約、太陽光発電等によるエネルギー生産、エネルギー効率の高い機器の導入、ⅴリサイクル、リユース等の資源節約および再利用、ⅵ植林、植樹等による緑化運動、有機農業等の環境にやさしい農業の推進、ⅶメディア等を活用した広報活動、ⅷ他団体とのパートナシップを進める等の活動を計画し、その後今日まで展開していることである。

また、世界の宗教界の環境保全運動に関する近年の動きとしては、国連も宗教界による環境保全運動の発展に大きな期待を寄せており、2008 年の国連総会における「宗教間および異文化間の対話、平和のための理解および協力の推進」（Promotion of interreligious and intercultural dialogue, understanding and cooperation for peace）決議を受けて、2010 年に「宗教と開発に関する国連機関間タスクフォース」（UN Inter-agency Task Force on Religion and Development）が設立され、2017 年に国連環境計画（UNEP）の中に設けられたフェイス・フォー・アース・イニシアチブ（Faith for Earth Initiative） が、2030 年に目標達成をめざしている「持続可能な開発目標（SDGs）」への貢献を目指して活動を展開している。

国連環境計画が 2020 年にまとめた報告書「国連持続可能な開発目標（SDGs）に対する信仰による行動――その進捗状況と展望」（Faith Action on the UN Sustainable Development Goals—Progress and Outlook）によれば、国連は宗教界に対して、SDGs17 項目のうち特に、環境に関する 6 つの SDGs すなわち「6（安全な水とトイレを世界中に）, 7（エネルギーをみんなに。そしてクリーンに）、12（つくる責任、つかう責任）、13（気候変動に具体的な対策を）、14（海の豊かさを守ろう）、15（陸の豊かさも守ろう） の環境 SDGs に向けて信仰に基づく組織（FBOs）の進捗に焦点を当てる。」に期待しているとしている。

同報告書においては、世界の諸宗教の環境保全運動の状況をまとめ、その中で宗教界の取り組みにおける 12 項目のトレンド（傾向）を示すとともに、注目に値する事例（Noteworthy Project）として 16 事例を掲載している。

また、同報告書には、宗教界に対して、「地球上の居住可能な地表の 8%、商業用森林 5%、世界の学校の 50%そして金融機関の 10%を支配していることである。これらの膨大な資源を含むポートフォリオからなる信仰に基づく組織の持続可能な開発に対する潜在的な影響力は計り知れない。」と、大きな期待を表している。

世界人口の 8 割が何等かの宗教またはスピリチュアルな団体に所属しているとされる現在、宗教界による環境保全運動が現実にどのようなインパクトを与えているのか、それらに対する社会的評価の実際についての検証を次なるステップとして研究を進めたい。

註

(1) 日本においては MOA 美術館において 1995 年 4 月 3 日～9 日（第一セッション）、英国・ウインザー城においては 4 月 29 日～5 月 3 日（第二セッション）が開催された。

(2) 伊勢神宮および志摩観光ホテルを会場に 2014 年 6 月 1 日～4 日にかけて環境問題に関する国際シンポジウムが行われ、彬子女王、高野山真言宗の松長有慶管長が貴重講演、英国王室からのメッセ―ジが寄せられ、会議をとおして自然環境保全の重要性、神道の自然観の意義、重要性が確認された。（2016 年 4 月 1 日、第 6 回宗教と環境シンポジウムにおける櫻井治男皇學館大学特別教授の基調講演より）

(3) ［佐田 2022: 38, 43, 47］を参照。
アッシジ宣言において、キリスト教については「人間の支配は、神が彼の栄光を明らかにするために作られたものを虐待、損ない、浪費、または破壊する許諾として理解して良いはずはない。その支配は、すべての生き物と共生する財産管理職（stewardship）以外の何物でもあり得ない。」［同: 38］、イスラム教については、「イスラム教徒にとって、地球上での人類の役割は、ハリファ（khalifa）すなわち副摂政、神の受託者である。私たちは神の命による地球上の財産管理人（stewards）であり代理人（agents）である。」［同: 43］、ユダヤ教については「自然界における神と人間との交わりは、ユダヤ教では、人間が自然界のリーダーであり管理者（custodian）として縫い目のない網のようにつながる存在として考えられている」［同: 47］と表現されている。

(4) ［クレッカー、トゥヴォルシュカ編 1999］を参照。
トゥヴォルシュカは、「人間は環境に対して自由な使用権があるにもかかわらず、最終的にはすべてのものの源泉である創造主に帰着するのであるから、イスラム教の環境倫理学は、人間中心的な側面がある にしても、総じて神中心的と言える。イスラム教に基づいた環境保護によって大地を守るのは、それ自身のためにではなく、神の戒めを尊重することか らである。人間と大地は、神の被造物として一なるものを形成し、人間が自分に委ねられた創造物に対し、かりそめの用役権限（コーラン 234）を持つ としても、両者は神に従属しているのである。」［同: 85-86］と述べている。

参考文献

石田友雄 1980 世界宗教史叢書 4『ユダヤ教史』山川出版社。

上田真啓 2017 『ジャイナ教とは何か』風響社。

教皇フランシスコ 2016 (2015) 『回勅ラウダ―ト・シ』瀬本正之・吉川まみ訳、カトリック中央協議会。

クレッカー, M.、トゥヴォルシュカ, U. 編 1999 『諸宗教の倫理学　第 5 巻　環境の倫理』石橋孝明・榎津重喜・山口意友訳、九州大学出版会。

佐田喜朗 2022 「多宗教による環境保全運動の嚆矢となった「アッシジ会議」 : 5 大

宗教による自然観・人間観の披歴と相互連携の始まり」『宗教と社会貢献』12(1): 29-51.
塩尻和子 2008 『イスラームの人間観・世界観』筑波大学出版会。
シング, コウル 1994(1993) 『シク教』高橋堯英訳、青土社。
世界宗教百科事典編集委員会編 2012 『世界宗教百科事典』丸善出版。
高木きよ子・岸本英夫編 1965 『世界の宗教』大明堂。
日本聖書協会編 1954 『聖書』日本聖書協会。
ハーツ, R・P 2003 (2002) 『バハイ教』奥西峻介訳、青土社。
溝口次夫・ワイスバード・リチャード編 2006 『環境と宗教』環境新聞社。
宮本久雄・大貫隆編 2003 『一神教　文明からの問いかけ一東大駒場連続講義』講談社。
村上嘉実 1983「錬金術」山田利明・村上嘉実他『道教 1－道教とは何か』平河出版社 285-328。
山田利明 1983「神仙道」山田利明・村上嘉実他『道教 1－道教とは何か』平河出版社 329-376。

和辻哲郎 2011 (1979) 『風土』岩波文庫。
Alliance of Religions and Conservation *ARC News and Features: Interview with Prince Philip* (http://www.ARCworld.org, 2022.1.26).
Chahal, Surjeet Kaur 2005 *Ecology Redesigning Genes: Ethical and Sikh Perspective.* Amritsar: Singh Brothers.
Edwards, Joe and Palmer, Martin 1997 *Holy Ground: The Guide to Faith and Ecology.* U.K: Pilkington Press.
Grim, John and Tucker, Evelyn 2014 *Ecology and Religion.* Washinton/Covelo/London: Island Press.
Hart, John 2017 *Religion and Ecology.* UK John Wiley & Sons Ltd.
Palmer, Martin, Nash, Anne and Hattingh, Ivan 1987 *Faith and Nature: Our Relationship with the Natural World Explored through Sacred Literature.* U.K.: Century London.
Shar, Nita and Deshwal, Anant 2023 *Religion and Nature Conservation: Global Case Studies.* London and New York: Routledge Taylor and Francis Group.
UNEP　Parliament of the World's Religions 2010 *Faith For Earth: A call for Action.* Augusta, Maine U.S.A : J. S. McCarthy Printers.
UNEP 2020 *Faith Action on the UN Sustainable Development Goals.*